

2024年6月16日 No. 3724

先週の講壇から

“ 花は美しい？ ”

マタイによる福音書 第6章 25節～34節

聖句「今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。」(6:30)

1. 《薔薇の名前》 「名前に何の意味があるのだろう。薔薇と呼ばれるあの花の、名前がどんなに変わっても、香りに変わりはないはずよ」。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の名台詞です。ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』という推理小説の由来でもあります。人は花の一つ一つに名前を付けて、愛して来ました。その花のメッセージを表わす「花言葉」も生まれました。特に紫スミレ、スノードロップ、忘れな草には、聖書と結び付けられた物語もあります。
2. 《御心に従う》 どうして花は美しいのでしょうか。人に見られようと見られまいと、誉められようと誉められまいと、自らの持てる力を出し切って、精一杯に咲いているからです。他の花を羨んだり妬んだりもしません。他の花を真似たりもしません。赤い花は赤く、黄色い花は黄色く咲いています。赤い花は自分が黄色くなりたいと思いません。神さまがそのように造ってくださったのです。それだから、無い物ねだりはしないのです。シモーヌ・ヴェイユは「万物は、造られた御方の御心に従ってのみ美しい」と言っています。そして花は、いつか散り行くことも知っています。「どうせ散るのだから、咲くのを止めよう」等と言うのは、愚かな人間だけです。散ると知っているからこそ、今、咲くのです。
3. 《花の美しさ》 お見舞いに花を贈るのは、花が和やかさと喜びをもたらしてくれるからです。自分に和やかさや喜びが無いと、人に和やかさや喜びをもたらすことは出来ません。和やかさとは不平不満が無いことです。不平不満は人に何かを要求する下心の裏返しです。出来る限りのことをしていれば、不平不満は生まれないのです。喜びは今の命を楽しむことです。明日のことを思い悩むならば不安です。「その日の苦労は、その日だけで十分」と知るならば、喜びが生まれます。花は咲く日（自分に最も相応しい時）が与えられるのを信じて待っています。無理に時を来たらせようとする、却って時を逸してしまうのです。黙って耐えれば、苦しみはその苦しみだけで終わります。騒ぎ立てる時、苦しみは更なる苦しみの連鎖を生みます。「御心のままになりますように」、それが花の心です。

朝日研一朗牧師